

歴史探訪

クラブ

其の
100



History Inquiry Club

文化財課 ☎23局3635

FAX 22局3811

田原のジョン万次郎たち 永久丸漂流の悲喜2

アメリカの捕鯨船に救助された勝蔵たちは、船長の配慮によって外国の文化と接する機会を得ました。捕鯨船に乗り、日本では想像もつかなかった国に行き、外見も言葉も違う人と接し、極寒の北の地や赤道ではうだるような暑さを経験しました。中でも、異国の大都会を見た勝蔵たちの衝撃は、計り知れなかったことでしょう。

怪物のような音を鳴らしながら走る「矢より早き」蒸気機関車に



▲「漂民間書」から蒸気機関車の図
(田原市博物館蔵)

乗り、ニューヨーク、ボストンにも出向きました。後に、彼らの話をまとめた田原藩の記録「漂民間書」(市指定文化財)には、特に蒸気機関車のことが詳しく書かれています。勝蔵たちは、その迫力にアメリカと日本の文明の差を大きく感じたに違いありません。

ところで、なぜ船長は彼らをアメリカに連れて行ったのでしょうか。世界を回る捕鯨船にとって、寄港できる港を確保することが大切です。日本もその一つに期待されていますが、当時の日本は鎖国の時代で、近づこうものなら砲撃されてしまいます。船長は彼らにアメリカのことを理解してもらい、帰国後にその理解者として日本で活躍すれば、開国への道が開くのではないかと考えていたのです。一介のアメリカの捕鯨船の船長が、国を越えた発想で物事を考えていた事実こそ、当時の日本

と大きく違うところでしょう。

嘉永5年(1852)9月に勝蔵たちと別れ、先に日本に帰った岩吉と善吉は、韓国経由で長崎へ護送され、1854年10月17日に故郷の江比間に戻りました。アメリカの文化に触れた勝蔵と勇次郎も12月に伊豆下田に帰国し、半年にもわたる奉行所の取り調べを受けた後、田原藩に身柄を移され、1855年9月4日に5年ぶりに故郷に帰ることができました。外国事情に詳しいということとで、勝蔵は帰郷してすぐに、病弱な勇次郎は1857年に、異例ともいえる武士へと出世しました。しかし家族との面会はできず、待っていたのは田原藩の重役による聞き取りでした。田原藩は渡辺崋山をはじめとして外国の情報収集を積極的に進めた先進的な藩でしたので、生の外



▲「漂民間書」からアメリカ人物図

国の様子を聞くには、海防政策上、絶好の機会だったのです。

安政4年(1857)、勝蔵は海外での航海の経験を生かし、岩次郎と一緒に田原藩自慢の西洋型帆船「順応丸」の水主として、藩の国内運輸で活躍しました。小さな船の水主から武士へと転身した二人は、現在なら英雄としてマスコミにも取り上げられ、語り継がれるでしょう。しかし鎖国という閉鎖的な時代のため、先に帰国した二人も同様に、漂流時のことは家族にさえ口にするのはなかつたようです。身分は得られても、彼らの業績は日の目を見ることはありませんでした。勇次郎については、その没年すら知られず忘れ去られたことは本当に残念なことです。(増山)

今月の「表紙」

▼滝頭公園の親水広場で
は、夏を待ちきれない子どもたちが水遊び。陽光を反射して、水面がキラキラと輝いていました。園内には、野球場やテニスコートなどのほかウォーキングコースもあり、運動するにはピッタリ。皆さんも、この夏は滝頭公園で輝く汗を流してみたいかがでしょうか。(〇)

「表紙」の写真は滝頭公園親水広場